

小 黒 智 久

(埋蔵文化財センター主査学芸員)

はじめに

SZ01 は直径約 11m の円墳である。墳丘盛土は完全に削平され、盛土下の旧表土も地山付近がわずかに残るのみで、遺存状態は良くない。部分的な調査に留まるが、富山県内では類例の少ない横穴式石室墳のため、数度の現地観察所見と調査報告書（富山市教委 2012）等に基づき、私見をまとめる。見解が異なる部分もあるので、報告書も併読いただきたい。

1 墳丘・周溝

古墳は井田川左岸の扇状地に囲まれた中位段丘に位置し、頂部から扇状地側（東南東）方向に向かう緩斜面奥部（標高約 60m）に立地する。横穴式石室を南東方向に開口させ、墳丘中心点と玄室対角線中点を合致させるように設計・施工された（図 1）。

古墳の正面観は羨道・墓道正面で、周溝の外側には平坦面が広がっていた。遺構の空白域となる当該部を儀礼空間と推定できる。石室内への雨水流入を避けるため、羨道・墓道正面付近の周溝を狭く、深く掘削し、緩斜面の方向に平行する排水溝（SD2）を接続させた。合理的な排水対策で、石室内と儀礼空間の良好な環境保持に努めたことがうかがえる。

2 横穴式石室

(1) 石室構造とその特徴（図 1）

玄室長 3.6m、玄室幅 1.2m、羨道長 2.2m、羨道幅 0.7m で、奥壁側から見て右側に袖をもつ狭長な片袖式石室（玄室比 3.0）である。羨道に約 1m の短小・幅狭の墓道が接続する。石室掘り方は奥壁から墓道に向かって窄まる形態で、墓道壁面（左壁）下部は石室掘り方がそのまま利用されていたと考えられる。墳端の崩れがあるので、尺度論には立ち入らない。

段丘礫を用いた壁体は、基底石を腰石として立位に据え、かつ長手積みする。その上部は小口積みし、長側壁は煉瓦積み主体と考えられる。本石室は、①基底石と柵石に他より大形の段丘礫を用い、それは特に玄室基底石に顕著なこと、②段丘礫（河原石）積みの横穴式石室では基底石から平積みすることが多いなかで腰石技法を採用していること、③柵石頂部と床面の比高が 45cm と大きいことが特徴である。腰石技法は県内初の確認例となった（注 1）。

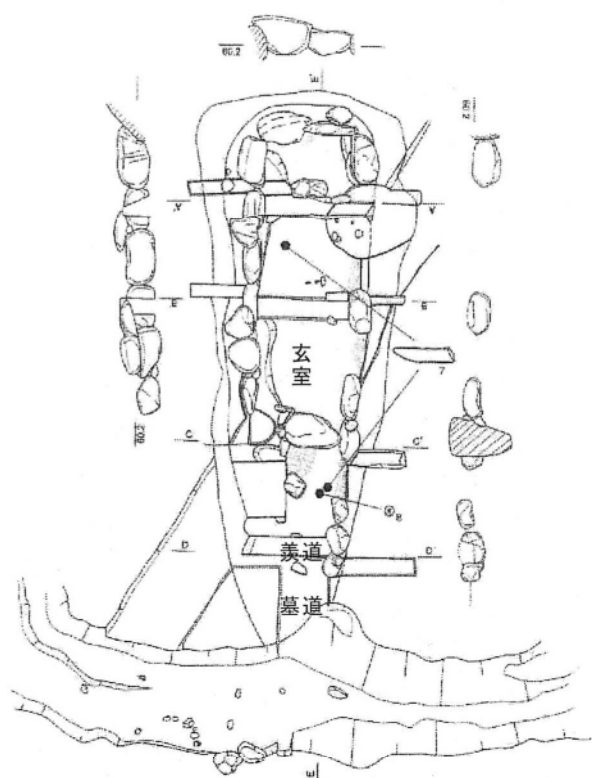
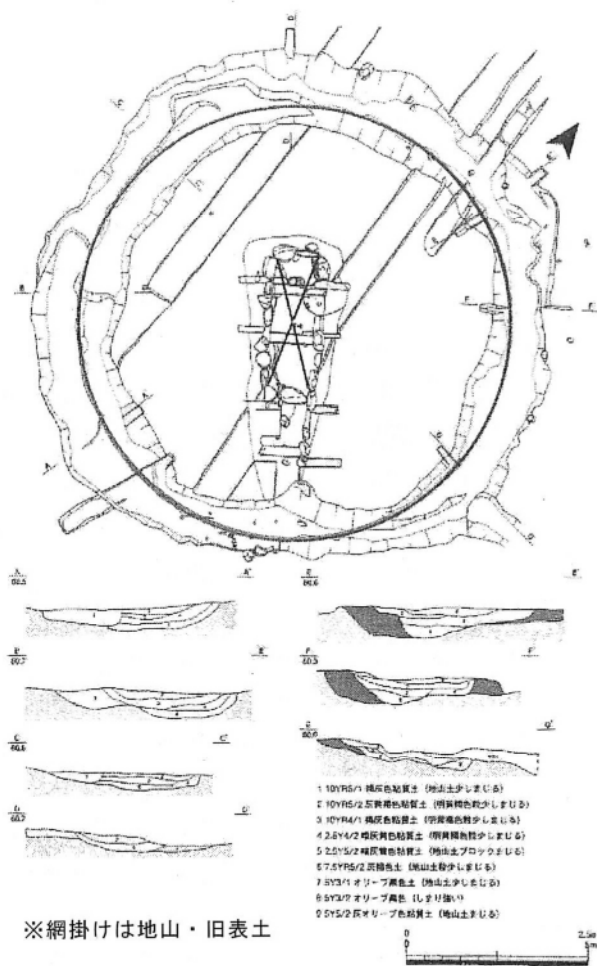
(2) 石室構造からみた年代観

①富山県内の資料からの検討

酷似例はないが、狭長な片袖式石室（小黒 2006b）という点では 6 世紀前葉（MT15 型式期）の氷見市朝日長山古墳石室が類似する。二本榎遺跡 SZ01 石室より狭長（玄室比 4.0）だが、玄室幅（1.2m）は共通する（注 2）。資料化された 7 石室から判断する限り、県内の横穴式石室は玄室が狭長な石室群（片袖式・無袖式）と両袖式石室群に大別できる。前者は朝日長山古墳石室・高岡市桜谷 8 号墳石室・二本榎遺跡 SZ01 石室・富山市伊豆宮古墳石室・上市町齊ノ神新 8 号墳石室が該当し、2 細別も可能である。後者は富山市呉羽山古墳石室・射水市生源寺新十三塚古墳石室が該当する。

北陸の導入期横穴式石室では狭長な例が少なく、朝日長山古墳石室は特殊例である。二本榎遺跡 SZ01 石室が含まれる狭長な石室群の年代幅を想定することは難しいが、6 世紀末葉（桜谷 8 号墳石室）（注 3）、7 世紀中葉頃か（齊ノ神新 8 号墳石室）と推定される例があり、朝日長山古墳石室以外の 4 石室は 6 世紀末葉以降、新しい時期のものほど無袖化したことがうかがわれる（注 4）。二本榎遺跡 SZ01 石室に 6 世紀前半の可能性を想定する必要はない。

両袖式石室は少ないが、新しい時期ほど玄室が短くなる（玄室比 2.1 程度→1.4 程度）。



石室内副葬品出土状態 (遺構図 S=1/100)



横穴式石室実測図 (S=1/100)

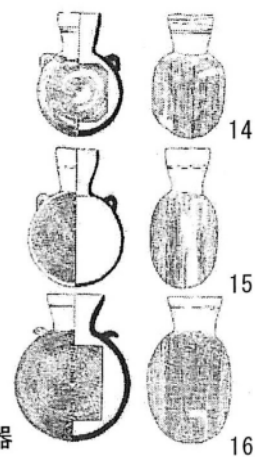
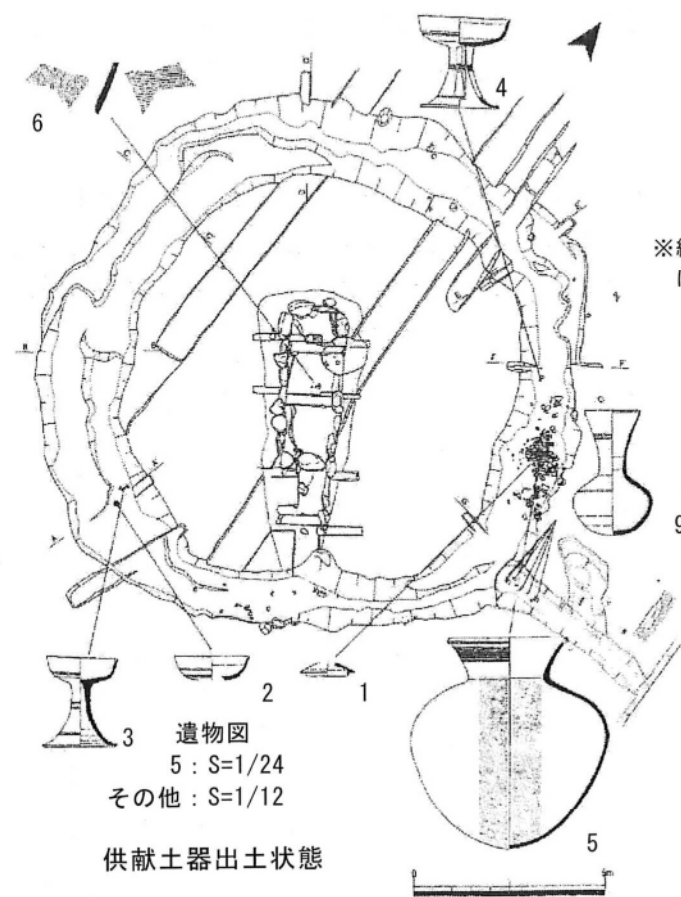


図1 二本榎遺跡 SZ01 の築造規格、供献土器等出土状態、採集土器 (富山市教委 2012 を改変作図)

②北陸の資料からの検討

富山県以外の北陸各地（福井県・石川県・新潟県）の横穴式石室にも、石室全体としての二本榎遺跡 SZ01 の酷似例は見出しがたい。それは、横穴式石室墳の盛行に伴い在地化が進み、地域性が発現するとともに、地域ごとの石材環境に応じた構造で構築されることが多くなることが理由と考えられる。一般的傾向として、玄室の狭長化は後出的要素と捉えられる場合が多い。問題は、北陸の片袖式石室の構築時期の下限をどこに求めるかである。

二本榎遺跡 SZ01 石室を基準に、玄室比 3.0 以上の狭長な片袖式石室を探索すると、福井県おおい町畑村古墳石室（TK209 型式期・玄室比 3.1）、福井市法土寺 3 号墳石室（TK209 型式期・玄室比 4.1）、石川県白山市田地古墳石室（TK209 型式期・玄室比 4.5）、石川県野々市町上林古墳石室（TK209 型式期・玄室比 3.0 程度）を例示できる。

使用石材の親縁性（河原石）を考慮するなら、田地古墳石室・上林古墳石室（注5）が参考になるものの、相違点もある。それは、二本榎遺跡 SZ01 石室が両石室と比べて袖部が明瞭で、袖の位置が異なることである。ただし、TK209 型式期における玄室比 3.0 未満の片袖式石室では、二本榎遺跡 SZ01 石室のように袖部が明瞭なものも認められるので、二本榎遺跡 SZ01 石室の袖幅を特別視することはできない。また、両石室では認められない腰石技法が採用されたことも相違点である。二本榎遺跡 SZ01 石室の腰石技法は、桜谷 8 号墳石室といった在地化した石室に由来する可能性が高い（注6）。

以上から、北陸における狭長化した片袖式石室の下限として TK209 型式期（6 世紀末葉～7 世紀前葉）を想定できることになる。二本榎遺跡 SZ01 石室は、構造上の特徴からこの時期幅で捉えられ、供献土器等の年代観も考慮して絞り込むことになる。

SZ01 石室は、構造や使用石材から北加賀の小古墳との類似性を指摘できた。当該石室は高度な構築技術が必要としない構造であり、北加賀からの集団移住も想定不可能ではない。北加賀の 2 石室との間における類似しない要素の評価が重要な検討課題となる。

3 供献土器と採集土器（須恵器）

(1) 出土状態と型式観（図 1）

墳丘側から周溝に転落した状態で短脚の無蓋高坏が 3 個体出土した。これらは、出土した供献土器のなかで最も年代推定が容易である。脚部が遺存しないものが 1 個体（報告書遺物番号 2、以下番号のみ記す）、ほぼ完存するものが 2 個体（3・4）ある。胎土や形態的特徴が

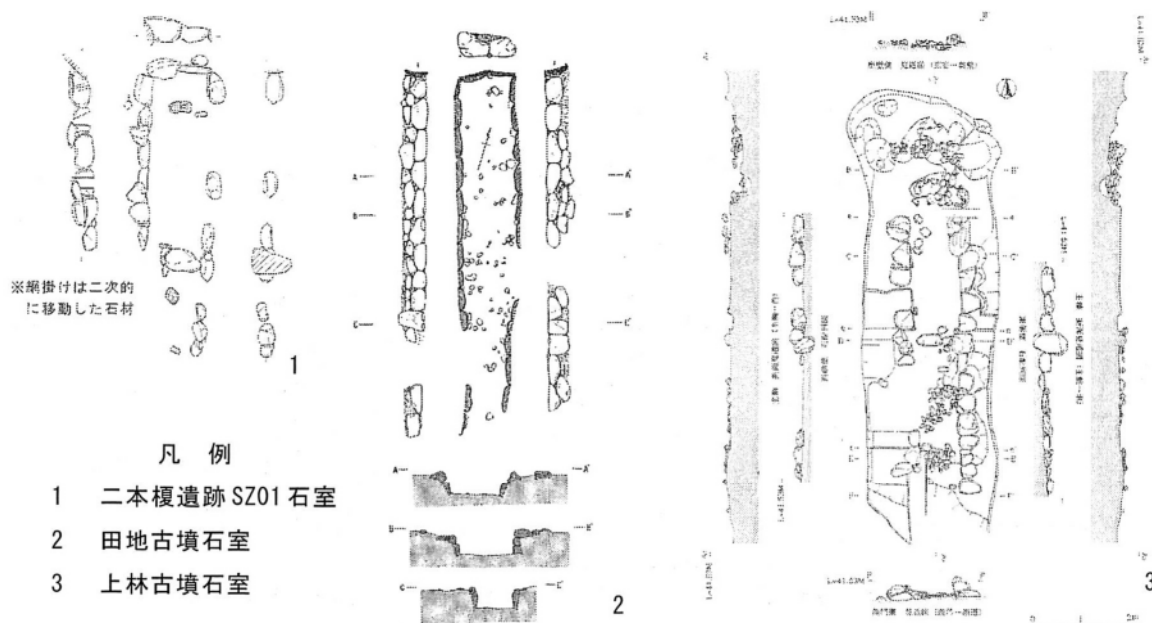


図 2 二本榎遺跡 SZ01 石室の類例（S=1/150、2・3 は報告書等から引用）



写真1 無蓋高坏 (3)

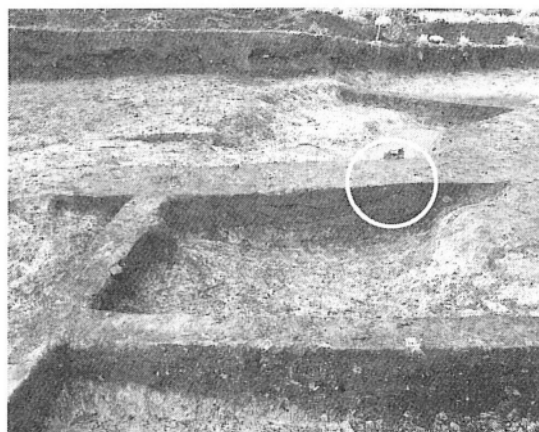


写真2 無蓋高坏 (4)

二本榎遺跡 SZ01 供献土器出土状態 (富山市教委 2012 掲載写真に加筆)

ら一見して在地の製品とわかる。在地の上野編年 (上野 2005) では射水 1 期 (新) ~ 射水 2 期 (古) に相当する。全国的な相対的位置付けを行うために陶器編年 (田辺 1981) に当てはめると、いずれも TK209 型式期に位置づけられる。土器群の出土層位は報告されていないが、現地観察所見と報告書写真等 (注 7) による限り、2 は周溝底面付近、3・4 は周溝中位付近で出土したものである。

排水溝 (SD2) 付近の周溝中位~上位で、幅 3m にわたって破碎した大甕の破片がばら撒かれていた。水平に分布しないことから、破碎行為は墳丘盛土と周溝端部との間の平坦面か、周溝外の平坦面で行われた可能性が高い。大甕破片の散布域で蓋 (1) の破片も出土した。また、排水溝中位~上位で長頸壺 (9) の破片が出土し、周溝出土破片とも接合した。これらは無蓋高坏の年代観より新相だが、詳細な年代推定は難しい。大甕・長頸壺に比べて年代推定が可能な蓋は、TK217 型式期に位置づけられる。上野編年では射水 2 期 (新) に相当しようか。同様に、大甕も TK217 型式期、長頸壺は TK217~TK46 型式期であろうか (注 8)。

かつて石室内から採集されたと推測される提瓶 4 個体のうち現存する 3 個体が資料化された (富山市教委 2012、図 1)。上野編年では射水 2 期に特徴的な形態的特徴をもつ。供献土器の年代観も考慮すると、TK209 型式期~TK217 型式期の幅で捉えられる。

(2) 暦年代観

筆者は TK43 型式以降、7 世紀の須恵器の暦年代観を次のように理解している。587 年から創建が開始されたとされる飛鳥寺下層出土須恵器が TK43 型式に相当することから、TK43 型式の下限年代を 590 年前後と推定する。TK209 型式以降は巽淳一郎氏の理解 (巽 1996) を参考とし、下限年代を 640 年前後と推定する。TK217 型式の下限年代は 670 年代後半、TK46 型式の下限を 690 年代前半と推定する。TK209 型式については、白石太一郎氏の理解 (白石 1996) を参考に 3 段階に細分する。例えば長脚二段無蓋高坏では、三方透かしのみの段階を TK43 型式、三方透かしと二方透かしが並存する段階を TK209 型式古段階、二方透かしのみの段階を TK209 型式中段階以降と比定する (注 9)。

(3) 二本榎遺跡 SZ01 の初葬時期と追葬期間

SZ01 では、TK209 型式期、TK217 型式期、さらに TK46 型式期に下る可能性がある供献土器が墳丘から周溝内に転落し、あるいはばら撒かれていた。個体数と出土層位を勘案すると、周溝底面付近が TK209 型式期、周溝中位~上位は TK209~TK46 型式期の葬送儀礼で供献された須恵器が堆積したものと考えられる。

周溝は最大 40cm の深さで遺存していたが、底面付近から中位までが須恵器 1 型式なのに対し、周溝中位~上位は最大で須恵器 3 型式と幅がある。自然堆積した周溝において、同じ堆積厚 (約 20cm) で須恵器の型式幅がある理由は、TK209 型式期の年代幅が他型式期より

長いことにあると考えるべきだろう。無蓋高坏の形態的特徴に注目すると、周溝底部付近で出土した 1 は坏部に段が 2 つあるのに対し、周溝中位付近で出土した 3・4 は沈線が 1 条あるのみで、後者が後出的様相と捉えられる。無蓋高坏の細部形態差は、同時期に製作・使用されたものの周溝への転落時期差が生じたと解釈するのではなく、製作・使用時期の差が出土層位の差につながったと解釈すべきものである。

以上の検討から、SZ01 は TK209 型式期（7 世紀初頭前後）に造営・初葬され、TK209 型式期（7 世紀前葉）・TK217 型式期（7 世紀中葉）に追葬された。さらに TK217～TK46 型式期（7 世紀中葉～後葉）に追葬された可能性も残る。遺存する初葬時の供献土器が 1 破片のみであることは、供献土器が 1 回目の追葬時まで片付けられたことに起因する蓋然性が高い。採集土器は 1 回目または 2 回目の追葬で副葬されたものと考えられる。最新相の供献土器は追葬ではなく、追葬終了後の墓前祭で供献された可能性もある。

以上から、本石室では最低 3 回の埋葬が行われたと判断できる。なお、羨道床面直上の堆積土出土炭化材（クリ）の放射性炭素暦年較正年代が calAD585・calAD637 だった（パリノ・サーヴェイ株式会社 2012）ことは、初葬および 1 回目の追葬に関する考古学的推定年代とも整合する。

4 まとめ

富山県域において、横穴式石室は 6 世紀前葉に地域首長層（朝日長山古墳）とその関係者（桜谷 7・14 号墳）のみが導入できた（小黒 2005a、第 I 期）。6 世紀中葉～後葉の空白期（第 II 期）を経て、6 世紀末葉～7 世紀中葉頃にかけて少数ながらも本格的に導入された（第 III 期）。第 III 期には横穴墓も県西部で盛行した。二本榎遺跡 SZ01 石室は、第 III 期のなかで初期の事例、また片袖式石室としては最終段階の事例である。本墳の歴史的意義を検討するには資料が乏しく時期尚早だが、現時点での見通しを示し、今後の調査研究の礎としたい。

存在形態 SZ01 が単独墳か、群集墳中の 1 基なのかによって評価が大きく変わる。道路法線内の試掘調査（注 10）で確認された古墳は本墳のみで、周辺に古墳は確認されていない。削平等により視認できない可能性も残り、調査区東側の緩斜面の物理探査等が必要である。

岡崎進農園内の「御坊立」出土とされるほぼ完形の須恵器群（婦中町 1967・1997）には 5 世紀後葉・6 世紀前葉・7 世紀前葉・7 世紀後葉のものが含まれ、遺存状態から古墳出土品の可能性があるものの、同一古墳からの出土品とは考えにくい。5 世紀後葉～6 世紀前葉、7 世紀代の古墳群が「御坊立」にあったとの解釈もできようが、一般的には墓域を違える場合が多いので違和感が残る。詳細

表 1 富山県内の主要横穴式石室の変遷

段階	時期	玄室が狭長な石室群		両袖式石室群
		片袖式	無袖式	
第 I 期	MT15 型式期 A. D. 500	朝日長山古墳		
第 II 期	TK10 型式期 A. D. 550			呉羽山古墳 生源寺新十三塚古墳
	MT85 型式期 TK43 型式期			
第 III 期	TK209 型式期 A. D. 600	二本榎遺跡 SZ01	桜谷八号墳 伊豆宮古墳 齊ノ神新八号墳	
	TK217 型式期 A. D. 650 TK46 型式期			

不明であり、「御坊立」や須恵器群の検討が必要である。

SZ01 から東北東約 300mにある小長沢 3 号墳も詳細不明だが、古式の須恵器細片が表採されている。器種は推定不能だが、断面がセピア色で陶邑産の可能性はある。富山県東部地域では、TK216～TK23 型式期の須恵器が少数流通するものの、本格的に流通するのは TK47 型式期からで、TK10 型式期に流通量が激減した後、TK43 型式期以降に再度流通量が増加する（小黑 2003）。北陸では MT15 型式期に須恵器生産が開始されるので、陶邑産須恵器の流入はほぼ 5 世紀代に限られる。この点を考慮すると、小長沢 3 号墳は 5 世紀後半代の蓋然性が高くなる。現状では、二本榎遺跡 SZ01 と同様の時期の古墳とは推定できない。

以上から、現状では SZ01 を単独墳と想定するのが妥当である。ただし、小円墳であることから、過大評価は慎まなければならない。

井田川流域の 7 世紀史 井田川流域の 6～7 世紀の社会状況は不明瞭である。その理由は当時の開発があまり進んでいなかったことによると思われる。当該期の遺跡分布が粗いために、不明瞭な状況にあると解釈する。この前提に立つと、7 世紀初頭前後から徐々に開始された当地の開発を主導した集団のリーダー層の古墳として、SZ01 が造営された蓋然性が高いのではなかろうか。SZ01 では 7 世紀後葉あたりまで半世紀以上にわたって埋葬やそれに関わる行為が行われたことから、当該期間の開墾集落が近隣に存在する可能性は高い。飛鳥時代の地域開発との視点で SZ01 や周辺の関連資料を検討する必要がある。また、注 4 で示した熊野川流域の伊豆宮古墳・古代集落群の展開などとの比較検討も必要だろう。

おわりに

井田川流域の地域勢力は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半に隆盛を極めたが、それ以降は衰退する。古墳時代中期後半～後期前半の古墳が存在した可能性もあるが、現時点では不明瞭な飛鳥時代以降の地域開発の先駆けとなった小集団が残した古墳として、二本榎遺跡 SZ01 を想定することができるのではなかろうか。

注

- (1) 資料化された他 6 例の県内資料は調査年次が古い。腰石技法かどうか確認されておらず、図面から確實視できる例もない。ただし、北陸では福井県永平寺町鳥越山古墳第 2 主体部（TK23～TK47 型式期）での初現後に北部九州系横穴式石室、あるいはそれらを源流として在地化した横穴式石室で広く採用される。富山県内でも氷見市朝日長山古墳石室や高岡市桜谷 8 号墳石室など、採用された可能性を否定できない例はある。
- (2) 朝日長山古墳は 6 世紀前葉における北陸有数の地域首長墳で、県内最古の横穴式石室導入例の一つである。特異な形態的特徴をもつ北部九州系横穴式石室であり、また二本榎遺跡 SZ01 とは被葬者の階層が絶対的に異なるので、両石室に直接的な関係は想定できない。
- (3) 桜谷 8 号墳石室（大村 1926）の玄室床面は土間で、奥部中央に石枕と考えられる平石があった。当該埋葬は、九州の横穴式石室が「棺」そのもの、つまり遺体を直接収める部屋であるという埋葬原理（藏富士 2007）を源流とするものであった。副葬品の出土状態（聞き取り）から、桜谷 8 号墳石室では複数回の埋葬が行われたが、少なくとも平石が使用された埋葬時は遺体を木棺内に収容せず、土間面で主軸平行葬したことがわかる。

玄門部幅 0.65m の二本榎遺跡 SZ01 石室は木棺搬入が困難であり、木棺に収容せずに遺体を玄室内に搬入した可能性が高い。

- (4) 伊豆宮古墳は直径 18m の単独首長墳（円墳）と推定され、TK217 型式期の須恵器のほか、刀子・紡錘車や TK209 型式期の壺鐙といった鉄製品が出土した。本墳は周辺（熊野川流域）で 7 世紀後葉から展開する古代集落群と密接に関係すると考えられる（小黑 2005b・2006a）。

伊豆宮古墳石室の玄室比は 2.9（玄室長 4.0m・奥壁幅 1.4m）で、齊ノ神新 8 号墳石室は玄室比 2.5（玄室長 2.5m・玄室幅 1m）である。

- (5) 両石室は約 2.7km しか離れておらず、石材や構造の類似性から同一石室群と評価できる。
- (6) 桜谷 8 号墳石室が位置した地番は、周囲が山林でありながら 1875（明治 8）年には畑地と

して利用されていた。1918（大正 7）年には同地番から 2・3 枚の大石が搬出された。1924（大正 13）年 12 月に約 100 個の石材が掘り出され、翌年 4 月に大村正之氏が現地調査と聞き取り調査を行って復原仮想図が作成された。調査以前で大部分の石材が失われ、二次的な移動を経っていたが、奥壁と片方の長側壁（東壁）は原状を保つと判断された。石室全体としては狭長な羽子板状に復原された。羽子板状の玄室をもつ無袖式石室としては伊豆宮古墳石室がある。

桜谷 8 号墳石室は羨道末端から 2 間ほど石積みが存在したらしく、筆者は閉塞石と解釈する。閉塞石の下には、大型扁平石材（縦横 7～8 寸、厚さ 4～5 寸）による礫床があったらしい。閉塞石が認められない部分が玄室となる可能性が高いので、玄室長は 3.1m 程度、玄室比は 1.9 程度となる。二本榎遺跡 SZ01 石室と比較して、桜谷 8 号墳石室は石室規模や玄室比など石室構造総体として古相を示すと判断してよいだろう。

- (7) 確認調査を担当した藤田慎一氏（株式会社上智 主任調査員）から出土状態の詳細についてご教示を得た。記して、感謝申し上げます。
- (8) 上野 章氏は、射水 2 期が TK217 型式期、同 3 期が TK46 型式期にほぼ該当するとされた。
- (9) TK209 型式の厳密な段階比定は、良好な一括資料でない限り、困難を伴う。
- (10) 計画法線が変更されたことで、二本榎遺跡内で二度にわたり試掘調査が行われた。今回の確認調査範囲の延長上の部分と、平行する東側約 50m の位置で、遺跡を縦断するように試掘調査が行われた。埋蔵文化財の所在が確認されたのは今回調査範囲のみである。

文献

- 上野 章 2005 「越中の 7 世紀の須恵器変遷について」『ふくおかの飛鳥時代を考える－富山・能登の横穴墓からのアプローチ－』ふくおか歴史文化フォーラム資料集 福岡町教育委員会・富山考古学会
- 大村正之 1926 「桜谷古墳群」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第 7 号 富山県内務部
- 小黒智久 2003 「越中東部地域における初期須恵器」『富山市考古資料館報』No.40 富山市考古資料館
- 小黒智久 2005a 「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第 25 号 湊 晨先生追悼号 富山考古学会
- 小黒智久 2005b 「呉羽山丘陵の横穴墓群」『ふくおかの飛鳥時代を考える－富山・能登の横穴墓からのアプローチ－』ふくおか歴史文化フォーラム資料集
- 小黒智久 2006a 「越中における古墳編年」『北陸の古墳編年の再検討』平成 17 年度富山大学人文学部公開研究会資料 富山大学人文学部考古学研究室
- 小黒智久 2006b 「飛驒の古墳と日本海」『山からみた日本海文化 I』日本海文化研究所公開講座平成 17 年度記録集 富山市日本海文化研究所
- 藏富士寛 2007 「北部九州の埋葬原理と石室構造」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 白石太一郎 1996 「土器よりみた古墳の年代」『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第 65 集 国立歴史民俗博物館
- 巽淳一郎 1996 「飛鳥時代の土器」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』福島古代史シンポジウム実行委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 富山市教育委員会 2012 『富山市二本榎遺跡確認調査報告書－主要地方道小杉婦中線道路改良事業に先立つ確認調査報告－』富山市埋蔵文化財調査報告 48
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2012 「二本榎遺跡の年代測定・微化石分析・石材鑑定」『富山市二本榎遺跡確認調査報告書－主要地方道小杉婦中線道路改良事業に先立つ確認調査報告－』
- 婦中町 1967 『婦中町史』
- 婦中町 1997 『婦中町史 資料編』